

時代別
日本文学史事典

有精堂編集部一編

中世編



有精堂

時代別日本文学史事典 中世編

ISBN 4-640-32533-9

1989年 8月 10日 初版発行

編 者 有 精 堂 編 集 部

発 行 者 山 崎 誠

〒101 東京都千代田区神田神保町1-39

発 行 所 有 精 堂 出 版 株 式 会 社

電話 03(291)1521～3番 振替 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN 4-640-30745-4 C3091

は し が き

現在、日本文学研究の展開は、その分野や方法・視点などにおいて目をみはるものがあり、各作品・作家の批評や研究は、従来の学説では想像できなかった地平さえもが開かれてきています。しかし、そうした個々の作品・作家研究を全体的に俯瞰し、有機的な関連性を捉える〈文学史〉の視座は、研究が精緻になればなるほど見失われ、時には今や文学史の時期ではないと言われている程です。

『時代別日本文学史事典』（全六巻）は、そうした風潮に敢て異を唱え、文学研究の基盤である〈文学史〉を新たに捉えなおそうとする視点から、単なる「辞典」でもない、論文として読むことができると同時に索引を用いて辞典の機能も果す「事典」として、日本文学史を組織することになったものです。従って、本事典は、大項目主義をとり、年代順・ジャンル等は従来の文学史を踏襲しつつ叙述しながらも、索引・脚注などを用いて、各項目を網状に組織し、各項目間の有機的な連関をはかり、従来になかった〈文学史〉を生み出したいと考えております。

本事典は主として、小・中・高の国語科担当の教師、及び大学の国語国文学関係の学生を対象としていますが、一般の文学研究者にも参考となるように、又、高校生等が図書館で使用することも視野に入れて編まれています。

以上のような趣旨のもとに、本事典では、各時代の必須の項目を多面的・多角的に掲げ、日本文学研究の第一線で御活躍の方々に、それぞれその最も得意とされる分野について、御執筆いただきました。御執筆の方々に、厚く

御礼申し上げますとともに、本事典の趣旨が読者に広く受容され、日本文学研究の新たな可能性と展望が見えてくることを願うものであります。

一九八九年七月

有精堂編集部

凡 例

一、本書は、通常の日本文学史の配列に従いながらも、〈説める事典〉としての機能をあわせもっている大項目主義をとっている。

二、本文は、本文部分と脚注部分に分かれている。本文部分は適宜小見出を付し、通史として全体の流れに重点をおいて執筆している。

なお、本文部分の中で、＊を付けた語は脚注項目として取り上げた語である。

一、脚注語として取り上げた語は、脚注欄にゴチックで表示した。ただしゴチック見出は＊印の語のままでなく、文意上より適切な表現に変えてあるものもある。

一、脚注語は、書名・人名・地名などの略述や、学術用語の解説・参考文献の紹介等にあて、又は本文で触れられなかった作品・書誌の解説にも触れている。

一、表記は、常用漢字表・現代仮名遣いによっている。読みの難解な語句にはルビを付した。引用文も支障のない限り、常用漢字表による漢字表記をとっている。

一、本事典に用いられている文学史用語・人名や、書名・歌合せ・絵画資料・研究論文などが容易に検索できるように、巻末に五十音順に事項索引と書名索引を付けた。

目次

はしがき

凡例

序章 総説

「文学」の拡がり ■ 中世文学概説 — 伊藤博之

2

「中世」という時代 ■ 中世史概説 — 桜井好朗

14

変りゆく日本語 ■ 中世語概説 — 柳田征司

25

第一部 詩歌

第一章 和歌

Ⅶ 和歌文学の極北 — 松浦朱実

36

「新古今」的理念と表現 (36) 泰斗定家 (43)

② 「新古今」なるものの展開 ——— 菊地 仁 55

「新古今」圏の歌人たち (55) 非「新古今」圏の歌人たち (60)
歌集の移ろい (65) 歌合の盛行とその特質 (68)

③ 和歌文学の変容 ——— 田村柳 壹 73

中世和歌の主流 (73) 鎌倉期歌壇の動向 (81) 南北朝の和歌 (89)
正徹の達成 (95) 和歌の地下水脈 (100) 狂歌の成立と展開 (107)

第二章 「座」における文学 ——— 岸田 依子 112

連歌の生成と興隆 (112) 求道と風狂 (125) 連歌から俳諧へのみち (129) 創作の
共同性の意味 (133)

第三章 歌 謠 ——— 井出 幸男 138

歌謡における中世 (138) 早歌 (宴曲) と武士社会 (141) 小歌時代の到来 (145)
閑吟集から宗安、隆達へ (149) 田植草紙と風流踊り歌 (152)

第四章 五山の漢詩 ——— 佐佐木 朋子 155

五山文学の定義 (155) 第一期の詩人と作風 (156) 第二期の詩人と作風 (161)
第三期の詩人と作風 (165) 第四期の詩人と作風 (166)

第二部 劇

第一章 劇としての能 —— 竹本幹夫・三宅晶子 170

能の形成 (170) 観阿弥の台頭 (171) 歌舞能の完成と世阿弥 (178) 世阿弥後の新

風 (188) 室町後期の作者群 (195)

第二章 狂言の成立 —— 田口和夫 200

世阿弥時代のヲカシ (200) ノレ猿楽から狂言へ (203) 天正狂言本の狂言 (207)

天正本以後の狂言 (208) 間狂言のこと (210)

第三章 曲舞と幸若舞 —— 小林健二 212

道の曲舞「加賀」の行方 (212) 曲舞から幸若舞へ (215)

第四章 雑芸と芸能集団 —— 小林健二 220

第三部 散 文 I ●王朝文芸の伝統

第一章 日記・随筆・紀行 —— 位藤邦生・三木紀人 226

日記の実録化 (226) 中世精神の表白としての随筆 (241) 交通の発達と紀行文の興

隆 (254)

第二章 歴史物語と史伝 — 増淵勝一 263

歴史物語の斜陽化 (263) 史論・史書と歴史意識 (273) 文学と古文書 (279)

第四部 散 文 II ●新しい表現

第一章 新しい表現形式と文学的現象 — 三谷邦明 284

和漢混淆文の眼差し (284) 和漢混淆文の可能性 (288) 中世文学の言説 (291)

第二章 中世物語の展開 — 神野藤昭夫 296

王朝物語の改作と行方 (296) 作り物語の変革 (304)

第三章 絵巻と文学 — 徳田和夫 313

第四章 語りの文学 — 兵藤裕己・増田 欣・加美 宏 327

軍語りと軍記 (327) 『平家物語』をめぐる (335) 談義する文学 (344) 浪漫化さ

れた軍記物語 (355) 〈語り〉と説経 (360) 音曲化された軍記物語 (364)

第五章 説話という表現 — 小峯和明 367

説話とは何か (367) 説話のコスモロジー (377) 仏教説話 (384) 世俗説話 (390)

説話の担い手と語り手 (396)

第六章 中世神話 — 山本ひろ子

399

寺社縁起 (399) 中世神道 (404)

第七章 中世宗教と文学 — 阿部泰郎

411

唱導の言葉 (411) 聖徳太子伝 (413) 唱導する聖人たち (415) 詠唱する聖人たち

(419) 遊行する聖人と女たち (422) 舞い歌うもの (424) 舞い語るもの (426)

第五部 散 文 III ● 中世の評論

第一章 学問と批評 — 黒田 彰

430

古典の注釈の系譜と実用の学 (430) 有職故実の探求と文学評論 (440)

第二章 歌 論 — 三輪正胤

443

中世歌論の特質と変遷 (443) 古今伝授 (450)

第三章 連歌論 — 岩下紀之

457

第四章 能楽論 — 三宅晶子

463

第五章 中世物語論 — 三田村雅子

471

第六部 中世文学の異相

第一章 琉球文学の中世——池宮正治

482

第二章 北方辺土の文学——佐々木孝二

488

*

執筆者一覧

495

索引

496

序
章

総

説

「文学」の拡がり ■ 中世文学概説

Ⅶ 末法思想と浄土教

『愚管抄』巻七に見える歴史の区分けによると、古代の時代は「敏達びんたつヨリ後一条院ノ御堂ノ関白マデ」で、その後は「世ノ末」の時代ということになる。慈円の目には、敏達より後一条までの約五百年間は「王法仏法ハ互ヒニ護リテ、臣下ノ家魚水合体ノ礼タガフ事ナクテ、カクメダタキ国ニテ」あり得た時代と映ったのである。

道長の死後、地方（鄙）で台頭しはじめた武家の勢力は表面では、貴族の従者の形をとりにながらも隠然たる力を誇示するようになり、「礼楽」の思想と文化的優越性を抛り所とした貴族の支配秩序の根幹をおびやかすに至った。このように王朝の衰運が誰の目にも明らかになりつつあった一一世紀のなかばに、仏滅年を周の穆王ぼく五一年壬申（紀前九四九年）とする説に基づき、正法千年・像法千年を経過した後、永承七年（二〇五）から末法に入るとする説が流布したことは、群盗が横行し、武装集団と化した僧徒の騷擾事件さうぶがあいつぐ時代相に裏うちされて時代人の危機意識を深めることになった。なかでも『大集（經）』五一に見える仏滅後二千年を経過した「後の五百年には闘とう諍堅固ならむ、白法びやくほう隠没せむ」の

御堂ノ関白

藤原道長（笑一（二〇五）を御堂関白という。後一条天皇は、道長の一女彰子（上東門院）が一条天皇の中宮となって儲けた外孫にあたる。道長は後一条天皇の即位とともに摂政となり榮華を極めた。一〇一七年に摂政を子の頼通に譲って太政大臣となったが、関白の職についたことはない。

仏滅年

古くは、周の穆王ぼく五一年壬申（前九四九年）説と周の匡王四年壬子（前七二二年）説が行われていた（『末法燈明記』）。ところが、『日本国現報善惡靈異記』の著者景戒は巻下の序で延暦六年（六七五）を仏滅後、一七二二年としているので、仏滅年は前九三五年と考えていたことがわかる。現在の通説では、前四八〇年頃と考えられている。

正法・像法・末法

正法の時代には、釈尊の教えが正しく伝えられ、その教えに従って修行すれば、仏のさとりを開くことができるが、やがて正法は伝わらなくなつて、正法に似た法（像は「かたどる」の意）が行われる像法の時代に入る。さらに時代

予言は、末法時代を生きる人間の自己認識を深化させる大きな契機となり、『末法灯明記』の著者が述べているように「すでに戒法なし。いづれの戒を破せむに由りてか破戒あらむや破戒なほ無し、いかにいはんや持戒をや」といった考え方を生むに至った。五濁悪世の末法の時代にあつては、修行によって悟りを得ることが不可能であるとする思想は、煩悩にまみれた悪人の普遍性の自覚を深め、さまざまな欲望や情念を生きる「ありのままにて、かざる心なき」（『和語灯録』）人間の姿を見据える目を養い、特に貴族知識人の人間観の変革をうながした。

法然は、その主著『選択本願念仏集』の巻頭に、中国の浄土教家道綽の『安楽集』上に見える一文を引用しているが、その『安楽集』に引かれている『大集経』月蔵分の次の一文は、末法時における浄土思想の拠り所とされた決定的なことばであつた。

我が末法の時の中の億々の衆生、行を起し道を修せむに、いまだ一人として得る者あらじ。当今は末法、現にこれ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。

日本の浄土教思想に多大な影響を与えた源信の『往生要集』の冒頭の一文が、「それ往生極楽の教行は、濁世末代の目足なり。道俗貴賤、誰か帰せざる者あらん。」とあるのも、『大集経』の一文に触発された思想の表明といえる。また、『往生要集』巻下には、「観経に云く」として、『観無量寿経』にそのままの形では見あたらない「極重惡人 無他方便 唯称念仏 得生極楽」（極重の惡人は、他の方便なし。ただ仏を称念して、極楽に生ずることを得）の句が見える。この句は『宝物集』によれば、後一条院の時、後に、末法第一年にあたる

が経過すると、文字による教えは残るが、教えに従って実践する者もさとりを得る者もいなくなる末法の時代になるという考え方。

『大集経』

六十卷。パーリ語・チベット語によって伝えられた經典もあるが、漢訳經典は隋代にまとめられた。末法についての記述は、「月蔵分」に見える。

『末法灯明記』

一卷。末法の時代の仏教のありかたを説いた書。柴西・法然・親鸞・日蓮の思想に深い影響を与えた書であり、親鸞は、そのほぼ全文を『教行信証』六に引用している。

永承七年に宇治の別邸を仏寺とし平等院と名づけた頼通が、延暦寺の学僧に「往生を願はん人のたもつべき文」をえらばしめた時、この文を奏したということであるが、この文は法然・親鸞の心をも深くとらえ、親鸞は『高僧和讃』中の「源信大師十首」の結びに「極悪深重の衆生は、他の方便さらになし、ひとへに弥陀を称してぞ、浄土にむまるとのべたまふ」と和讃している。西行も『聞書集』にこの句による釈教歌をよみ、長明の『発心集』巻七にもこの句を引き、「我等 流来生死のつたなき凡夫なり。忽ちに不退の浄土に生れがたしと卑下すべからず。」と自らに確かめる文を添えている。この句は『宝物集』に「唯称念仏」の句を「唯称弥陀」と伝えて以来、すべてこの形で流布するようになった。謡曲にもこの句の全文を引く曲に「大原御幸」「柏崎」「土車」などがあり、悪人往生思想の拠り所として中世人に広く口ずさまれたものと考えられる。

中世文学の基調の一つに数えることができる浄土思想は、源信が『往生要集』の序に「予が如き頑魯の者（かたくなで愚かな者）」と述べているように、末法時における人間の本質を「悪性さらにやめがた」き「煩惱具足の凡夫」と見ぬいた自己認識の深まりに根ざした救済原理であったのである。『梁塵秘抄』に「弥陀の誓ひぞ頼もしき 十悪五逆の人なれど 一たび御名を称ふれば 来迎引接疑はず」「われらは何して老いぬらん 思へばいとこそあはれなれ 今は西方極楽の 弥陀の誓ひを念ずべし」「晝しづかに寢覚めして思へば涙ぞおさへあへぬ はかなくこの世を過ぐしても いつかは浄土へ参るべき」と謡われた浄土信仰は、院政期から中世へ、そして近松の世話浄瑠璃にまで及ぶさまざまな文学に深い陰をなげかけており、名もなく地位もなく、ひそやかに生きる庶民の「弥陀の誓

弥陀の誓ひ

阿弥陀仏は、まだ法蔵菩薩であった時に、一切衆生の救済を願って四十八の誓いを立てた。阿弥陀の浄土は、この誓願を完成することによってもたらされた世界である。その十八「設ひ我仏たるを得んも、十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生れんと欲し、乃至十念せんに、もし生れずんば正覺をたらじ」の願が本願と呼ばれ、念仏往生の根拠とされた。浄土教は『無量寿経』に説かれているこの「弥陀の誓ひ」に基づいて成立した。

ひを念す」る心のまことを主題とする説話や物語を数多く生み出すに至った。

② 死を契機とした生の認識

『一遍上人語録』には、「或時、野原を過ぎたまひけるに、人の骸骨おほく見えければ」と詞書して、次の歌が収められている。

惜しめどもつひに野原に捨ててけり　はかなかりける人のはてかな

皮にこそ男女おとこおんなのいろもあれ　骨にはかはるひとかたもなし

人の死をかなしみいたむ心を表現した歌は『万葉集』をはじめとして多くの歌集に見られるが、死をめぐる思弁を歌に表現することは、中世に入って目立つ発想といえることができる。西行の『山家集』にも「無常の歌あまた詠みける中に」と題して、

いづくにか眠り眠りてたふれ伏さんと思ふ悲しき道芝の露

死にて伏さむ苔の莖を思ふよりかねて知らるる岩陰の露

のように自分の死についてあらかじめ想像する心のはたらきを歌によんでいる。このように「死」における孤独を見つめる目と死後の世界を想像する心のはたらきは、中世仏教のひろまりと共に中世人の共通観念となっていた。現世を「仮りの世」と観じ、わが身を「仮りの身」と自覚しながらも、この世での名誉や利害、人間関係の愛憎に執着せずにはいられない「妄執」の生をとらえることが中世文学の主題となった。

「死」が無明長夜の闇にとざされた生の時間からの目ざめの時であり、我欲・我執にとざされた煩惱の迷いから脱け出し得る唯一の契機であるとするなら、「死」は「人間として達し得る最上至高の状態」ということになる。浄土教による往生の思想は、こうした

『一遍上人語録』

一遍(三元一三六)は、伊予の豪族河野通広の子として生れたが、二十歳の頃出家し、浄土教に帰依し全国を遊行した。その死に際し、身に携えていた一切の聖教を焼き捨ててしまったので、一遍の書いたものは残っていない。『語録』二巻は、門弟が伝承した法語を近世に入って集録したものである。

「妄執」の生

日本人の人間悪の自覚は浄土教の厭離穢土の思想によって深化されたといえることができる。特に「往生要集」の「大文第一」に明らかにされた六道の相は、中世文学に多大な影響を及ぼした。また、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六道の苦の相を集約した「六道講式」は、叡山の横川で修せられる二十五三昧式の式文として源信が作ったと伝えられ、その文は曲調とともに聞く人の心を深くとらえた。その中の「人道」の一部を『日本歌語集成』巻四によって引用すると、

深く名利に貪著して、生死を厭はず。とこしなへに愛欲にかかはつて浄業を修す